

『詩歌三国志』

松浦友久／新潮選書

学生の頃、恩師から言われた言葉で今もよく覚えているものがあります。「人は、若い時には科学に志し、齢を重ねると歴史に想いを馳せる」。当時は、漠然と聞いていたのですが、その年齢になると“なるほど”と納得するようになります。

私より年配の方ならば、三国志と言うだけで全てが通じるのではないかと思います。若い頃に、吉川英治の三国志を読み耽ったものです。現在では、北方謙三の三国志が文庫本で書店に並んでいますので、若い人にも知られているかもしれませんが。ローマ帝国の衰亡に関する歴史書は世界で最大のベストセラーと思いますが、日本においては、三国志が古代から教養人の必読書であったと思います。

三国志の時代は紀元180年頃から280年頃で、三国とは、当時興隆していた中国大陸での魏、呉、蜀です。その興亡を記録した歴史家陳寿の筆になるものが『三国志』と呼ばれ、以来、数多くの作者が三国志を手掛けています。ウィキペディアによれば、760年に成立した『藤氏家伝』大織冠伝（藤原鎌足についての伝記）に関連する記述があるとのことなので、すでに日本にも伝わっていたと思われます。

ここで紹介する本は、詩歌の分野で扱われた三国志の中で、土井晩翠（1871-1952）の「星落秋風五丈原」を取り上げ、その背景にある唐代の詩人、李白（701-762）や杜甫（712-770）等の漢詩をからめて1冊の書物にまとめ、解説したものです。晩翠の詩の主題は、云わずと知れた蜀の丞相“諸葛亮（孔明）”の生涯です。晩翠はこの長編詩を28歳の時に発表しているとのことでした。漢詩に通じ、三国志を愛して詩歌に結晶させた才能には、ただただ畏れ入るしかありません。

詩の醍醐味は言葉の響き、リズムとイメージを膨らませる言葉使いです。意味が多少分らなくても、響きがよくリズムカルな句は右脳に溶け込みます。短い表現でも、瞬時に情景が目に見え、イメージが膨らんで行きます。私もナツメロ世代に入っていますが、昔流行ったメロディを聴くと当時の気分が瞬時に甦ってきます。詩もそれと同じです。

「星落秋風五丈原」は7章、44節で計349行に及ぶ長編詩です。内容は、数巻に及ぶ物語を凝縮していて、以下の句で幕が開きます。

キザン 祁山悲秋の風更けて	(キザンヒシュウノカゼフケテ)
ジンウン 陣雲暗し五丈原	(ジンウンクラシゴジョウゲン)
レイロ アヤ 零露の文は繁くして	(レイロノアヤハシゲクシテ)
草枯れ馬は肥ゆれども	(クサカレウマハコユレドモ)
蜀軍の旗光無く	(シヨクゲンノハタヒカリナク)
コカク 鼓角の音も今しずか	(コカクノオトモイマシズカ)
ジョウショウ 丞相病あつまりき	(ジョウショウヤママイアツカリキ)

何やら悲愴なイメージです。実は、諸葛亮（孔明）の臨終の場面から始まります。序章の52行は7つの節で構成されていますが、各節の最後は『丞相病あつまりき』の句の繰り返しで切迫感を出しています。孔明は臨終を魏との戦いの場（五丈原）で迎えています。蜀軍の状況描写から始まり、孔明の来し方が走馬灯のように回り始める序章となっています。第7節の最後には、孔明の偉大さと比較する人物として

カンチュウ 管仲去りて九百年	(カンチュウサリテキュウヒャクネン)
ガッキ 樂毅滅びて四百年	(ガッキホロビテヨンヒャクネン)
タレ 誰か王者の治を思ふ	(タレカオウジャノチヲオモウ)

と中国では歴史上の名宰相管仲や名将樂毅が出てきます。実は、名前だけは聞いたことがあったのですが、両名の人物像が分からなかったので、早速、書店でそれぞれを扱った小説を買って読みました。

第2章は、青年孔明が蜀王劉備玄德から三顧の礼で迎えられる場面の描写です。

ウセンカンキン カ 羽扇綸巾風輕ろき	(ウセンカンキンカゼカロキ)
姿は替へで立ちいづる	(スガタハカエデタチイズル)
ソウロ 草廬あしたのぬしやたれ	(ソウロアシタノヌシヤタレ)

まさに、若き孔明が颯爽として旧居を後にする姿が目には浮かびます。この章以降は経時的にストーリーが進みます。孔明が鬼神の智謀を発揮し、小説でも名場面となっている「赤壁の戦い」、「出師の表」などが格調高く吟じられ、蜀の興隆のために捧げた赤誠の遍歴を辿って、再び五丈原の戦場に戻ってきます。そして、終章の最後の節は、詩人晩翠が孔明に捧げる万感の想いとして、以下のように詠いあげられています。

高き尊きたぐひなき	(タカキトウトキタグイナキ)
「悲運」を君よ天に謝せ、	(ヒウンラキミヨテンニシャセ)
青史の照らし見るところ	(セイシノテラシミルトコロ)
管仲樂毅たそや彼、	(カンチュウガッキタソヤカレ)
伊呂の伯仲眺むれば	(イロノハクチュウナガムレバ)
「萬古の霄の一羽毛」	(バンコノソラノイチウモウ)
千仞翔る鳳の影、	(センジンカクルホウノカゲ)
草廬にありて龍と臥し	(ソウロニアリテリュウトフシ)
四海に出でて龍と飛ぶ	(シカイニイデテリュウトトブ)
千載の末今も尚	(センザイノスエイマモナオ)
名はかんばしき諸葛亮。	(ナハカンバシキシヨカツリョウ)

執筆者紹介

丸山 久一

本学理事・副学長（研究・入試・学生担当）。専門領域は、コンクリート工学。

【書名】 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
 『詩歌三国志』 松浦友久著 新潮社 1998年 1,260円

ブックガイド目次へ